

救援者の災害ストレス (PTSD, CIS) の予防とケアに関する臨床心理学的研究 (I)

～惨事状況とストレスの関連に視点をあてて～

鹿児島純心女子大学大学院			餅原尚子
鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科M2			松田英里
同	上		成願めぐみ
同	上	M1	久木崎利香
同	上		有留香織
同	上		永田純子
同	上		坂元真紀
同	上		前原加奈
同	上		松元理恵子
鹿児島純心女子大学大学院			久留一郎

和文要旨

災害の体験によって直接の被災者だけでなく、救援者も大きな影響を受ける。海外での先行研究と同じく、わが国の救援者においても心的外傷性ストレス症状 (post-traumatic stress reaction) の割合が高いことが明らかになっている。救援者は災害現場に出場し、被災者と同じような体験をすることによるストレスを受けることになる。一方、職業的救援者であるがゆえに一般的な被災者とは別のストレス (災害出場を忌避できない。社会的な期待が大きい。) に加え、特有の義務感、責任感や弱音を吐きにくい組織的風土が加わる。まして、箝口令が敷かれているとなおさらである。本研究では、消防職員、海上保安官、警察官、救急救命士が直面する惨事状況とストレスの現状について明らかにすることを目的とした。

アンケート調査を実施し、そのうち消防職員356名、海上保安官80名、警察官854名、救急救命士200名の有効回答を得ることができた。惨事の状況については、消防職員が最も多く、凄惨な惨事に直面していることが明らかになった。

I. 問題

東京消防庁において過去に最大のCIS (Critical Incident Stress) をもたらした災害は1964年の東京勝島倉庫爆発火災であるといわれている。この火災は消防職員18名、消防団員1名、計19名が一瞬の爆発で殉職し、114名が負傷した極めて異例な災害である。当時の出場隊員の手記には、生き残ったことへの罪悪感、怒り、茫然自失など、CISによる苦悩があったと示されている。この災害では、後日精神疾患を患ったり、あるいは、いたたまれずに退職した者もいたという (伊藤, 1999)。

しかしその後、わが国においては、阪神・淡路

大震災が起きるまでは、災害救援者のストレス症状や精神保健対策については、正面切って論じられることはあまりなかった (岩井ら, 1998)。

一方、諸外国では、1980年前後より、欧米を中心に取り上げられていた (Bryant, et al, 1997; Fullerton, et al., 1992; Gist, et al., 1995; Hytten, et al., 1989)。

わが国では、1995年に起きた阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件等を契機として、この問題に対する関心が寄せられるようになったといわれている。阪神・淡路大震災における災害活動に従事した消防職員のストレス状況については、神戸市消防局が調査を行っており、この調査によると、

少なからぬ消防職員に一定期間経過後も心的な後遺症が遺っているとの結果が出ていた。また、東京消防庁が実施した地下鉄サリン事件に出動した消防職員に対するアンケート調査の結果でも、2割近い消防職員が活動後に不安感や落ち着かないなどのストレス症状を自覚していた（総務省消防庁，2003）。

最近では、2001年9月1日に発生した新宿区歌舞伎町ビル火災等を背景として、関心はますます高まっている（総務省消防庁，2003）。

さらに、畑中ら（2004）は、全国から無作為に選ばれた消防職員1914名を対象として、職務上の体験がもたらす外傷性ストレスを検討している。職務上衝撃的な体験をした者は、有効回答者の58.1%であり、衝撃的な体験があった者のうち、IES-R（改訂出来事インパクト尺度；Impact of Event Scale Revised；Weiss, D.S., et al., 1997）によってPTSDの可能性が高いとみなされた者は15.6%であったという。また、繰り返し災害に曝露されるという職務の特殊性が、消防職員の外傷性ストレス反応を悪化させていることが示唆された。

災害の体験によって直接の被災者だけでなく、救援に従事した者も大きな影響を受ける。阪神・淡路大震災においては、消防職員、医療関係者、ボランティア、さらには行政担当者など、多くの救援者たちが深く傷ついていたことが、さまざまなかたちで報告されている（神戸市消防局「雪」編集部，1995；南，1995）。

Nurmi（1999）は、フィンランド沿岸で沈没したエストニア号の救助に関わったレスキュー隊員と消防職員、警察官、および看護師を対象にIES-Rを実施し、看護師、警察官、レスキュー隊員、消防職員の順に得点が高かったと報告している。

海外での先行研究と同じく、わが国の災害救援者においても心的外傷性ストレス症状の割合が高いことが明らかになっている（廣川ら，2005）。

職業的救援者にとっては、単に生命脅威事件の「目撃」や、いわゆる「身代わり体験」であるに

とどまらず、自己の職業人としての尊厳にかかわる体験である（岩井ら，1998）。

また、職業的災害救援者は災害現場に出場し、被災者と同じような体験をすることによるストレスを受けることになるが、一方、職業的救援者であるがゆえに一般的な被災者とは別の、次のようなストレスが加わるという。消防職員を例にあげてみると、

①災害出場を忌避できない

消防署に勤務している以上、災害出動することを拒めない。

②社会的な期待が大きい

消防職員に対して、大きな期待をもつ一方で、その期待に応えなければならないという義務感、責任感をもって、どんな危険な現場であっても社会的な期待に応えていくという職業的な意識を強く持っている。

③特有の組織的風土（弱音を吐けない）

災害現場に出動して、相当なショックを受けて帰っても、公言して弱音を吐くことができない。ましては、箝口令が敷かれているとなおさらである。

これらのことから、被災者とまったく異なるストレスを受けるといわれ、職業的災害救援者は「隠れた被災者」になる危険があるといわれている。「隠れた被災者」は、なかなかその本心は出せず、ストレスが高じる危険が非常に大きいと考えられるなど、職業的災害救援者は特有のストレス要因をたくさん持っているといえる（東京消防庁，2001）。

（1）消防職員のストレス

特定の比較的大規模な災害が消防職員に及ぼした影響を研究したのも多くみられる一方で、負傷者の対処や事件に巻き込まれた子どもとの遭遇など、日常業務の中で経験される比較的小規模な出来事においても、消防職員がストレスを被ることが明らかにされている（Moran, et al., 1995）。

わが国でも「東京消防庁惨事ストレス対策」を制度化した当初は、阪神・淡路大震災をはじめ、

地下鉄サリン事件、また最近では、新宿歌舞伎町雑居ビル火災やニューヨーク同時多発テロ事件等大規模な災害現場活動で必要な対策であると考えられていたが、現在は、個人のストレスに対する感受性には、災害の大小は無関係であるともいわれている（五十嵐，2002）。

2001年10月、44名が死亡した東京都新宿区歌舞伎町の雑居ビル火災で、救助にあたった救急・消防隊員の3人に一人、約120名がC I Sの症状を感じていたという。2001年6月、大阪府池田小児童殺傷事件では、現場にかけつけた救急隊員の中には、不眠や中途覚醒、フラッシュバックなどの症状がみられ、池田市消防本部などは消防隊員を対象に、カウンセリングを実施したという。2004年の長崎県佐世保市の小6同級生殺害事件でも現場にかけつけた消防局の救急隊員もC I Sの症状を訴え、専門家のケアを受けていたという。

海外の先行研究では、災害救援活動に伴う心的外傷体験に曝露した消防士にはPTSDの割合が高い（ラファエル、1988；Fullerton, et al., 1992）だけでなく、心身の不調を訴える割合も増加し（Marmar, et al., 1966）、また急性ストレス障害（ASD：Acute Stress Disorder）、PTSD、うつ病となる危険が高まる（Fullerton, et al., 2004）ことが報告されている。

このように消防職員は、火災等の大きな災害現場などで悲惨な体験や恐怖体験をした場合に強い精神的ショック、ストレスを受ける。また、通常災害においても、例えば、その強い責任感から被災者を救済できなかった場合等に罪悪感を感じたり、自分の子どもと同年齢の子どもの遺体を扱った場合に、遺族の気持ちに感情移入することなどで、ストレスを受けることもあるとされている。このようなストレスを受けたことにより、身体、精神、情動または行動にさまざまな障害が発生するおそれがあることが指摘されている。そして、職業意識から弱音が吐けず、個人の悩みが抑圧されることで、ストレスが高じる危険が大きくなる場合もある（総務省消防庁，2003）。

（2）海上保安官のストレス

海上保安庁において、惨事ストレスによるメンタルヘルスへの重要性が大きく注目されるきっかけとなったのは、2001年12月、九州南西海域で発生した不審船事案である。不審船からの銃撃により、巡視船上の海上保安官3名が負傷し、巡視船にも大きな被害が出た。戦後初めての銃撃戦であり、この事案に関与した海上保安官の場合、直接体験（被害）であったため、PTSDの発症が危惧された。筆者らは、「PTSD予防対策員」として直後より、予防を含めたサイコエデュケーション、PTSD症状の把握と個別相談に応じてきた。勇猛果敢な彼らであったが、察するに国家の機密にかかわっていたことや（誰にも話せない状況にあった）、前戦で命を張った彼らが事案の加害者の疑いで、船内で調書を書かされていたこと（実際、相手船の乗組員は自爆による死亡が確認された）など、二重、三重のストレスを抱えていた（久留ら，2003）。

本事案は正確には戦闘関連ストレスの範疇に入るもので、災害救援活動に伴うストレスとは本質を異にする部分がある。しかしながら、海上保安官の業務は、領海警備、密輸密航の監視取り締まり、テロ対策などの治安活動から海難救助まで多岐にわたっている。こうした背景から、海上保安庁では、海上保安業務に伴う心的外傷性ストレス全般を広く惨事ストレスと捉えて、その実態把握と対策立案に向けた実態調査を実施している（廣川ら，2005）。

（3）警察官のストレス

警察官の場合も外傷的状況が急激で予測不能な危険や異常により、さらに脅威的である場合には、適応的とはいってもより不安の大きい反応を生じる。このような状況ではパニックにおちいり、発汗、心悸亢進、胃痛など、恐怖を感じるほどの身体感覚を伴う。このような状態になると過覚醒状態になる。署に戻ってもリラックスして安定した状態にはなかなかない。体験内容を吐き出すことも時には必要である。事件に関して書かれた

報告書にもケアレスミスが含まれていることがあるという。過覚醒状態は人の批判力を削ぎ、正確な時間や場所の情報をしばしば歪める。ことに外傷的出来事により感情的に消耗した場合、後にPTSDを発症する危険性が高くなる (Classenら, 1998)。

また、急な状況では急性の不応反応を生じることがある。このような反応は、無力感や人の命を危険に曝した者への過剰な反応といった、激しい感情を伴うことがある。急性の影響として、Marmarら (1996) は、外傷体験時解離症状がみられると述べている。この場合、時間感覚だけでなく、知覚の性質が特別な形で変化する (Bertholdら, 2001)。この外傷体験時の解離症状として特徴的なのは、そのときの知覚である。それは、実際の速度よりかなり遅く「ゆっくり」動いているように見えるという。またそれは、何か架空の物のようであり、音も実際よりかなり小さく感じるといえる。

また、Gersons (1989) は、銃撃戦に関わった警察官の業務低下率について報告している。彼らのほとんどはその事件以前には業務効率に問題はなかった。事件の数ヶ月後からイライラしやすくなったり、民間人や同僚に対して攻撃的となり、また集中力にも問題が出てきた。本人や上司はそのような行動の変化を過去の事件と結びつけなかったし、警察官は症状を否定しようとしていた。また、再体験症状があっても我慢し、口にすることは無いという。PTSDとなった者はパニックを引き起こすこともあるが、周囲から気づかれないように回避するのである。症状が存在することや職場での働きぶりが減退することを恥と感じ、批判されたり、昇進のチャンスを逃すことを恐れるのである。些細なことで口論となったり、アルコール摂取量が増え、新たな危機的イベントが起きたときに、隠せなくなり、PTSDの症状が現になることが多いといわれる。

(4) 救急救命士のストレス

救急救命士とは、病気や交通事故、災害などに

よる緊急時又は、重度の傷病者を、現場から病院や診療所に搬送する間、観察・評価し、医師の指示に基づいた救急救命処置を含む処置全般を行なうスペシャリストのことをいう。救急医療の最前線での救急救命士への期待は高まるばかりだが、まだまだ日本全体の救急救命士の数は決して十分とはいえない状況にある。

救急隊員には、救急救命士法に定める「救急救命士」と消防法施行令に定める「救急隊員」がある。「救急救命士」が行うことができる応急処置は、消防法施行令に定める救急隊員が行うことができる応急措置に加え、救急救命士でなければできない応急処置がある。

救急救命士が行う救急救命処置は、救急車等による搬送途上において、無線等による医師の指示の下に、その症状が著しく悪化するおそれがあり、その生命が危険な状態にある傷病者に対して行うものであり、特定の知識及び技能を要するものである。人の命を左右するという点では救急隊員以上に責任が重く、ストレスも負荷しやすいことがうかがわれる。

II. 目的

本研究では、職業別に体験する惨事状況を比較し、ストレス (CIS, PTSD) との関連について明らかにすることを目的とする。

III. 方法

(1) 対象

消防職員 (某市消防職員及び某県中級幹部) に対しては2003年6月、惨事ストレスに関する研修会開催前に、参加者全員に配付し、その場で回収した。某海上保安本部海上保安官 (特殊救難隊: 危険物積載船の火災などの救助をはじめ、転覆船や沈没船内からの人名救出、ヘリコプターから降下しての避難者の救助など高度で専門的な知識技能を必要とする救難業務を任務とする者) に対しては2003年11月、某市勤務の警察官には2005年8月、某県救急救命士会会員 (有資格者のみ。ただし、消防職員対象の調査で同アンケートを記入

した者は除く) に対しては2005年8月に、いずれも管理職を通してアンケート調査を実施し、回収後はそのままトラウマ・ケアの専門家(筆者ら)へ渡されるという条件で依頼をしてもらった(個人の情報が職場内に漏れることのないよう配慮した)。いずれも無記名による回答である。有効回答数(惨事体験者)、性別、既婚・未婚の有無を表1に示す(消防職員の中には救急救命士も含まれるが、消防職員の場合は、「消防-救助-救急」のローテーションを組むということから、救急救命士と分けて調査し、分析を行った。無解答は除く)。

表1 有効回答数

対象者	有効回答数(人数)	男性	女性	既婚	未婚
消防職員	356名	98.3%	0.3%	80.9%	14.0%
海上保安官	80名	95.0%	3.8%	75.0%	20.0%
警察官	854名	94.7%	3.4%	73.5%	18.7%
救急救命士	200名	99.5%	0.0%	88.5%	9.0%
合計	1490名	96.2%	2.2%	77.4%	16.4%

性別では、男性がほとんどであり、既婚者が77.4%であった(無記入は除く)。

平均年齢は表2の通りであり、40歳代前半が多かった。

表2 対象の平均年齢

対象者	平均年齢(歳)
消防職員	42.3
海上保安官	43.1
警察官	41.6
救急救命士	39.8

内訳をみると、消防職員は50歳代が37.7%、40歳代が23.2%、次いで20歳代が21.0%、30歳代が18.1%であった。海上保安官は、40歳代が34.2%と最も多く、次いで50歳代31.6%、20歳代20.3%、30歳代13.9%であった。警察官は50歳代が32.2%、40歳代が26.6%、20歳代が22.5%、30歳代が18.0%であった。救急救命士では30歳代が40.7%と多く、次いで40歳代33.7%、

50歳代15.1%、20歳代10.6%であった。

全体では、50歳代が31.2%、40歳代が27.2%、30歳代が20.8%、20歳代が20.4%であった。救援歴20年前後のベテラン者が多かった。

(2) アンケート項目

職種により、若干の表現を変えたが、内容はすべて統一した。

「惨事の状況」ならびに「惨事時の気持ち」については、加藤(2001)の「災害救援者のチェックリスト」を引用した。また、「惨事後の気持ち」については、久留(2004)の「PTSD: DSM-IV修正版」を引用した。

IV. 結果と考察

(1) 過去の印象に残っている惨事

総務省消防庁(2003)によると、消防職員1516名(回答率79.2%)のアンケート調査からは、消防職員のうち58%が、この10年間に何らかの衝撃を受けた災害に出動していた。その災害は多岐にわたるが、主に、建物火災13.9%、交通事故救援13.7%、地震災害6.8%となっていた。

今回の調査結果では、これまでの救援活動で最も印象に残っている惨事は、職務上の違いはあるものの、表3に示されるように、消防職員は交通事故(22.5%)、火災・焼死(17.7%)、海上保安官は遺体収容(45.4%)、転覆事故など(14.5%)、警察官は交通事故(11.4%)、工場爆発事故(8.8%)、救急救命士も交通事故(28.0%)、火災・焼死(8.5%)などが多くみられた。

古賀ら(2003)の調査では、消防隊員の69.4%(489名)が「殺人・災害等の現場を目撃」し、「交通事故」が68.4%(482名)、「火事・爆発事故」が61.6%(434名)に認められている。廣川ら(2005)による海上保安官を対象にした調査結果(対象者384名)では、「海難救助(14.5%)」「不審船事案(6.1%)」「犯罪捜査(9.7%)」「集団密航事案(5.7%)」の順で多く認められた。

表3 惨事（これまでの救援活動の中で凄惨で印象に残っていること）

消防職員	%	海上保安官	%	警察官	%	救急救命士	%
交通事故	22.5	遺体収容（水死、爆死など）	45.4	交通事故	11.4	交通事故	28.0
火災、焼死	17.7	転覆事故など（水難事故）	14.5	工場爆発事故	8.8	火災・焼死	8.5
大水害	15.2	職員の負傷、殉職	9.0	自殺	8.2	列車事故	8.0
工場爆発事故	9.6	不審船事案	9.0	大水害	7.0	土砂災害、崖崩れ	8.0
土砂災害、崖崩れ	8.7	自身の危険（転覆など）	7.2	列車事故	5.2	水害・水死	5.0
自殺	7.9	荒天下での海難救助	5.4	土砂災害、崖崩れ	4.9	自殺	4.0
列車事故	3.9	顔面裂傷の目撃	3.6	火災・焼死	4.0	大水害	2.0
水害、水死	3.9	焼死体の搬送	3.6	水害・水死	3.4	工場爆発事故	0.5
転落事故	1.7	行方不明の捜索	3.6	など		転落事故	0.5
など		その他（船内暴動、密漁取締など）	12.7			など	

また、その惨事後、何年経過しているかについて尋ねたところ、5～10年が消防職員（36.6%）、海上保安官（22.5%）、救急救命士（30.5%）と最も多かった。警察官では10～20年が最も多く（21.2%）、勤務し始めた頃の印象が今現在も心に遺っていることがうかがわれる。

以下、(1)に挙げられた、過去の救援活動の中で最も凄惨で印象に残っている惨事の状況、その時のストレス（CIS）、その後のストレス（PTSD）、その緩和要因等について分析した。

(2) 惨事状況（アンケート8. ①～⑪より）

①通常では考えられない活動状況であった（図1）

消防職員、警察官、救急救命士は、約3～4割が「はい」と回答している。海上保安官は全体の8分の1（12.5%）にみられた。

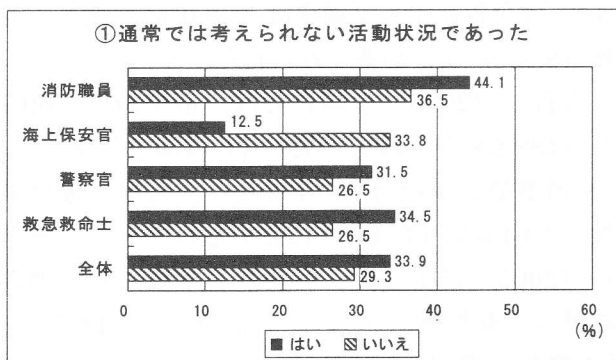


図1

②悲惨な光景や状況に遭遇した（図2）

消防職員、警察官、救急救命士の5～8割が「はい」と答えているが、海上保安官は約3割（31.3%）であった。小西（2001）によると、阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査（消防職員5103名中有効回答数4780名）では、「悲惨な光景が多少またはかなりこたえた」という職員が71%にみられた。この結果から本調査対象の消防職員の方がもっとも高く、阪神・淡路大震災以上の悲惨な状況を体験していることが明らかになった。

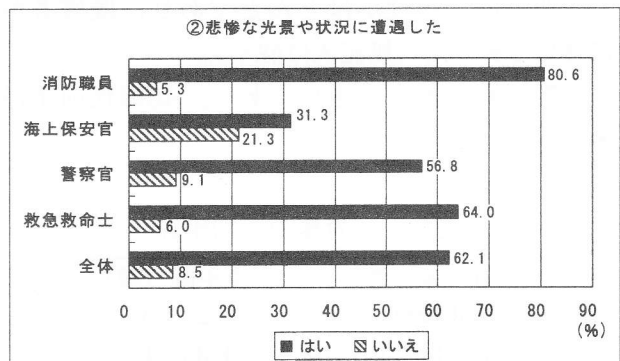


図2

③ひどい状態のご遺体を眼にした、あるいはかかわった（図3）

ここでも消防職員、警察官、救急救命士の約5～7割は、「はい」と回答しているが、海上保安官は約3割であった。総務省消防庁消防課（2003）によると「消防職員の現場活動に係るストレス対策研究会」による調査（1900人：有効回答者数880名）結果では、「死体を見た、ある

いは死体に触れた」者が51.7%、「死体が凄惨あるいは衝撃的な災害であった」者が48.0%であり、今回の結果の方がかなり高い結果であった。

消防職員については、大水害 (34名) と工場爆発事故 (54名) との比較 (いずれも、過去最大の凄惨な出来事とあげていたもの) では、工場爆発事故の方がひどい状態のご遺体を眼にしていた ($p<0.05$) ことが認められた。事故後、2名の行方不明者がいたことが大きく影響しているようである。

総務省消防庁 (2003) によると、衝撃を受けた現場では、「死体を見たあるいは触れた」(体験者中の比率51.7%) など死体への接触や、「自分と同年代の者が死亡した」(23.3%) など、自分の家族を想起させる人が被害者となったケースが多かったという。

廣川ら (2005) の海上保安官を対象にした調査 (対象者384名) では、「凄惨な死体を見た、あるいは死体を扱った」者は26.3%であり、ここでも本調査対象者 (特殊救難隊) の惨事状況の凄惨さがうかがわれる。

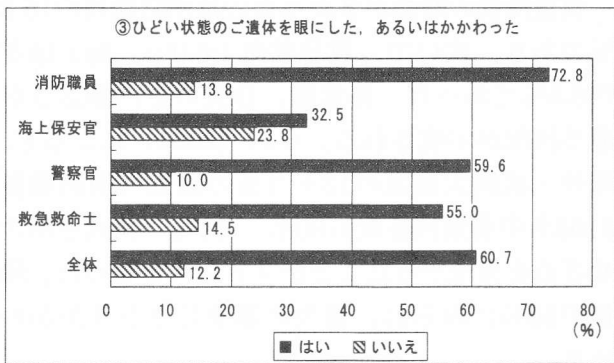


図 3

④自分の子どもと同じ年齢の子どものご遺体にかかわった (図 4)

消防職員、海上保安官、警察官、救急救命士ともに8.8~19.5%と、約1~2割はそのような体験をしていたことが示された。また、消防職員が自分の子どもと同じ年齢の子どものご遺体にかかわった際、有意にPTSDに発症しやすい ($p<0.01$) ことが見出されている (餅原ら, 2005)。

消防科学研究所第4研究室 (1998) による東京消防庁の職員1096名を対象にした調査では、日常的な救援活動中に衝撃的な災害に遭遇した消防官のうち、68%が災害ストレスを感じたと報告している。特に、幼い子どもが亡くなったり、母子が犠牲になった事件や犯罪に巻き込まれた被害者に接したときにストレスが高くなっていた (松井ら, 2003)。

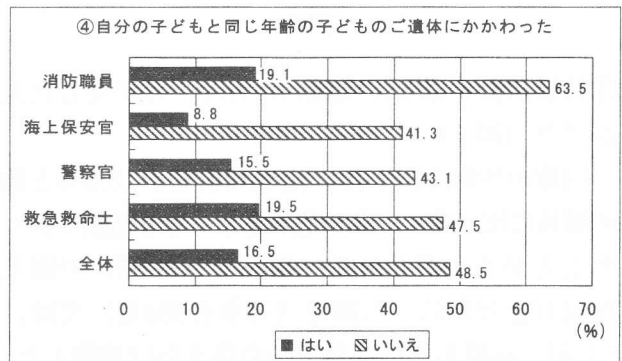


図 4

⑤被害に遭われた方が知り合いだった (図 5)

救急救命士が14.0%と最も多く、全体の平均は6.4%であった。

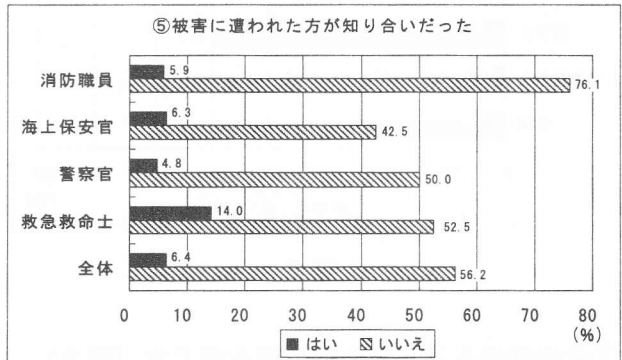


図 5

⑥自分自身あるいは家族が被災した (図 6)

これについても、全体の平均が1.3%と少なかった。

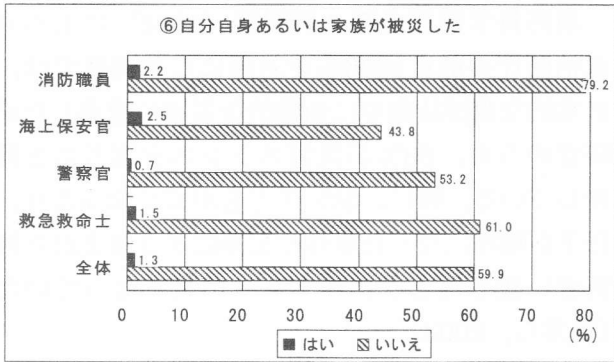


図 6

⑦救援活動を通して殉職した方や、けがをした人がでた (図 7)

同僚の殉職やけがは、海上保安官が13.8%と他の職種に比べ多く、身の危険をともしなう活動であったことがうかがわれる。廣川ら (2005) の海上保安官を対象にした調査 (対象者384名) では、「上司、同僚あるいは部下が負傷または殉職した」者は8.6%にみられ、今回の調査結果の方が高いことが見出された。

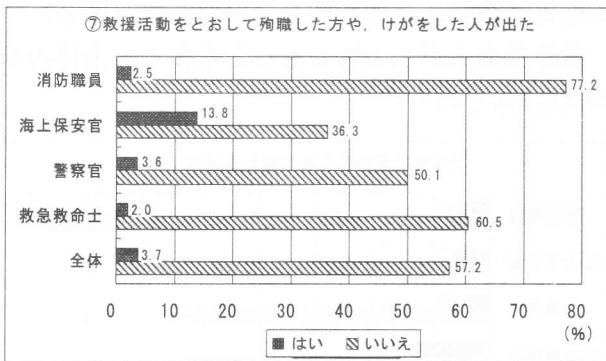


図 7

⑧救援活動を通して命の危険を感じた (図 8)

消防職員の約3割 (35.4%) は自分自身の命の危険を感じながらの業務であったことが示された。次いで海上保安官が26.3%、救急救命士17.0%、警察官は14.6%であった。

阪神・淡路大震災の際も、現場活動中に生命の危険性を感じた、あるいは悲惨な光景に直面しそれが精神的に大きな負担になっていた者の6割強が、震災体験や救援活動を通して恐怖感や無力感を感じ、他群に比べ、有意に高率であったという

(岩井ら, 2002)。また、小西 (2001) によると、阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査 (消防職員5103名中有効回答数4780名) では、生命の危機を感じた職員が57%にみられ、今回の調査対象者の海上保安官の体験に匹敵するような数値であることが見出された。

また、廣川ら (2005) の海上保安官を対象にした調査 (対象者384名) では、「自分の身に危険を感じた」という者は34.9%であった。

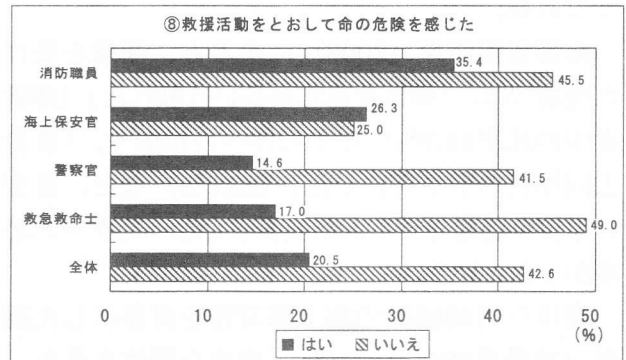


図 8

⑨救助を断念せざるを得なかった (図 9)

救援活動の断念が多かったのは消防職員の15.2%であり、次いで、救急救命士8.0%、海上保安官6.3%であった。罪悪感、自責の念、無念さが遺る状況が示唆される。小西 (2001) によると、阪神・淡路大震災の13ヶ月後の調査 (消防職員5103名中有効回答数4780名) では、「消火を断念せざるを得なかったことがストレスとなった」職員が50%にみられ、震災の凄まじさがうかがわれる。

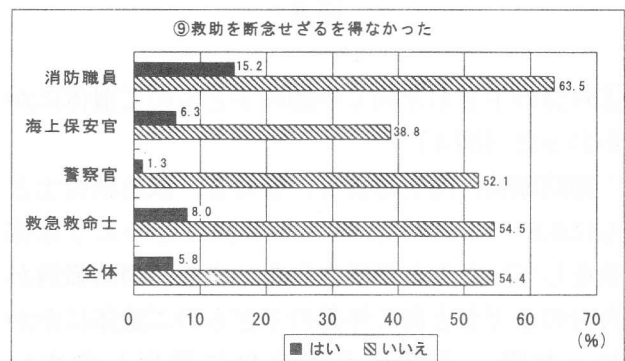


図 9

⑩十分な活動ができなかった (図10)

十分な活動ができなかったと不全感を残している者は全体の15.8%にみられた。ある海上保安官によると、目の前にご遺体があっても引き上げられなかった時のストレスはかなり強いという。

阪神・淡路大震災の際も、その後の業務に関して強く後悔した者、現場活動以外の状況でストレスを強く感じたとした者の割合も他群に比べ、有位に高かったという (岩井ら, 2002)。また、消防職員の場合、死体に接する機会は日頃から一般人に比して多く、職業的救援者としての責任感やプライドが高い者では、存命救助がなしえなかった場合に受けるストレスは却って大きいといわれる (岩井ら, 1998)。今回の結果でも消防職員の27.5%が「はい」と回答していた。

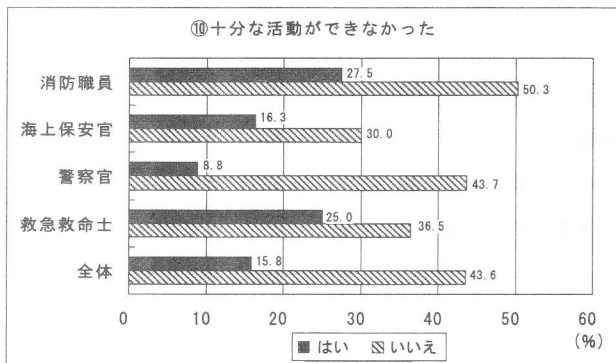


図10

⑪住民やマスコミと対立したり、非難された (図11)

非難されたのが最も多かったのは救急救命士で7.0%、海上保安官が6.3%であった。自責の念に加え、他者からの非難は更に深く心を傷つけるものと思われる。

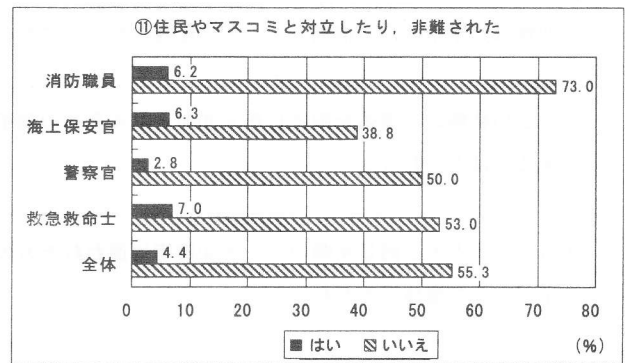


図11

以上、惨事状況については、消防職員、警察官、救急救命士が遭遇し、眼にしたのは「悲惨な光景であり、ひどい状態のご遺体にかかわっている」者が5~8割にみられた。一方、海上保安官においては、殉職者や自分自身の身の危険を感じる者が他の職種より多いことが見出された。

(3) 惨事状況とCIS (消防職員)

消防職員が体験したそれぞれの惨事状況に「はい」とつけた人がCISの各項目のどの項目に「はい」をつけているのかを χ^2 検定してみると、表4のような結果がみられた (餅原ら, 2005)。「⑥自分自身あるいは家族が被災」したという惨事、「⑩十分な活動ができなかった」という惨事に遭うとCISの5項目以上に回答していることが見出された。さらに、全職種全体を分析した結果、「⑩十分な活動ができなかった」とCISの「⑨あの時ああすれば良かったと自分を責めてしまった」という項目において、やや弱い相関(N=833, $r = .358$)が認められた。

表4 「惨事状況」と「惨事に直面した時の気持ち (CIS)」

「惨事状況」	×	「CIS」	
①通常では考えられない活動状況	×	②精神的にとても疲れた	*
		③被害に遭われた方の状況を自分のことのように感じた	*
		⑨あの時ああすれば良かったと自分を責めてしまった	*
		⑩何となく身体の調子が悪かった	*

②悲惨な光景や状況に遭遇	×①動揺した。とてもショックを受けた	*
③ひどい状態のご遺体を眼にした あるいはかかわった	×⑩何となく身体の調子が悪かった	*
④自分の子どもと同じ年齢の 子どものご遺体にかかわった	×③被害に遭われた方の状況を自分のことのように感じた	*
⑤被害に遭われた方が知り合い	×⑥この仕事に就いたことを後悔した ⑦仕事に対するやる気をなくした。辞めようと思った	** **
⑥自分自身あるいは家族が被災	×⑤上司や同僚あるいは組織に対して怒り・不信感を抱いた ⑥この仕事に就いたことを後悔した ⑦仕事に対するやる気をなくした。辞めようと思った ⑧投げやりになり皮肉な考え方をしやすくなった ⑨あの時ああすれば良かったと自分を責めてしまった	** ** ** ** *
⑦救援活動をとおして殉職した人 やけがをした人が出た	×⑤上司や同僚あるいは組織に対して怒り・不信感を抱いた ⑥この仕事に就いたことを後悔した ⑦仕事に対するやる気をなくした。辞めようと思った ⑧投げやりになり皮肉な考え方をしやすくなった	* ** * **
⑧救援活動をとおして命の危険を 感じた	× (特になし)	n.s.
⑨救助を断念せざるを得なかった	×④誰にも体験や気持ちを話せなかった。話しても仕方ないと思った ⑤上司や同僚あるいは組織に対して怒り・不信感を抱いた ⑧投げやりになり皮肉な考え方をしやすくなった	* * *
⑩十分な活動ができなかった	×②精神的にとっても疲れた ⑤上司や同僚あるいは組織に対して怒り・不信感を抱いた ⑥この仕事に就いたことを後悔した ⑧投げやりになり皮肉な考え方をしやすくなった ⑨あの時ああすれば良かったと自分を責めてしまった ⑩自分は何もできない、役に立たないという無力感を抱いた	* ** * ** ** **
⑩住民やマスコミと対立したり 非難された	×⑦仕事に対するやる気をなくした。辞めようと思った ⑧投げやりになり皮肉な考え方をしやすくなった ⑨あの時ああすれば良かったと自分を責めてしまった	** * *

(注) * p < 0.01 ** p < 0.001

(4) 惨事状況とPTSD症状

惨事状況の各項目とDSM-IV-TR (APA,2002) によるPTSDの各17項目について、それぞれ χ^2 検定を試みた(表5)。最も多く体験していた(全体の62.1%)「悲惨な光景や状況に遭遇した」者は、「繰り返し思い出された」といった再体験の症状と結びつきやすいことが明らかになった($p<0.01$)。同様に「ひどい状態のご遺体にかかわった」者は、再体験の症状に加え、回避の症状との有意な関係が認められた($p<0.01$)。

また、全体の16.5%にみられた、「自分の子どもと同年齢の子どものご遺体にかかわった」者は、17項目中12項目にみられ、しかもその症状が現在も残存していることが明らかになった($p<0.01$)。

さらに、15.8%の救援者にみられた「十分な活動ができなかった」者も、17項目中12項目にみられ、しかもそれらの症状が現在も継続していることが見出された($p<0.0001$)。

悲惨な状態の遺体の収容や殉職者が出た場合など、通常と異なる状況下で活動した場合は、PTSDなどの心理的障害の発生率は長期にわたって高まるとした報告も多い(Fullerton, et al., 1992; McCarroll, et al., 1995; Bryant et al.,

1996; Ursano, et al., 1999)。

Corneil(1995)は、自殺事件や自身に後遺症が遺る事件などの外傷性出来事がPTSDにつながることを明らかにしている。また、古賀ら(2003)の調査では、489名(69.4%)が「殺人・自殺・災害・事故などで人が死んだり、ひどい怪我をした現場を目撃した」体験があるなど、日常業務でもCISを受けていることを示した。

危険性の高い職業に従事する者は、突発的で「コントロール不能」な状況に遭遇することが多く、PTSDを発症する危険性を生じる。つまり予測していない事態が急に起きたり、もしくは通常予測されるものよりはるかに極端でまた異様な状況の場合である。また自分自身の命が思いがけず危険に曝される時、PTSD発症の危険性は増大する。災害救援者が、死亡もしくは負傷した被災者の姿に自分もしくは自分の家族の姿を重ね合わせてしまうと、危険とは「他人のみに起こるもの」という前提が覆され、PTSD発症の危険性が増加するという。また、自動車衝突事故で死亡した子どもに遭遇したとき、同年齢の子どもをもつ警察官の方がより影響を受けやすかったという報告もある(Gersons,2000)。

表5 惨事状況とPTSD症状

惨事状況	×	PTSD症状	
通常では考えられない活動状況	[再体験]		
	×繰り返し思い出された		*
	×また起きたのではないかとびっくりした		***
	×思い出させる物で心が痛んだ		***
	×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した		***
	[覚醒亢進]		
	×ちょっとしたことに用心深くなった		**
悲惨な光景や状況に遭遇	[再体験]		
	×繰り返し思い出された		***
	×思い出させる物で心が痛んだ		***
	×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した		*
ひどい状態のご遺体への接触	[再体験]		
	×繰り返し思い出された		***
	×繰り返し夢にみた		*
	×またおきたのではないかとびっくりした		*
	×思い出させる物で心が痛んだ		***

	<p>[回避と感情の麻痺] ×思い出させる出来事や場所を避けた ×将来のことを考えられなくなった</p>	<p>** *</p>
<p>自分の子どもと同年齢の子ども のご遺体への接触</p>	<p>[再体験] ×繰り返し思い出された ×繰り返し夢にみた ×またおきたのではないかとびっくりした ×思い出させる物で心が痛んだ ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺] ×話題にすることを避けた ×思い出させる出来事や場所を避けた ×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</p> <p>[覚醒亢進] ×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×カッとなり, イライラするようになった ×ちょっとしたことに用心深くなった ×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>*** *** *** * * ** ** * *** *** * * *</p>
<p>被害者が知り合いだった</p>	<p>[回避と感情の麻痺] ×話題にすることを避けた ×思い出させる出来事や場所を避けた ×趣味, 仕事に打ち込めなくなった</p> <p>[覚醒亢進] ×ものごとに集中できなくなった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>* * * ** *</p>
<p>自分自身や家族が被害に遭った</p>	<p>[回避と感情の麻痺] ×一人ぼっちになった感じがした ×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった ×将来のことを考えられなくなった</p> <p>[覚醒亢進] ×カッとなり, イライラするようになった ×ものごとに集中できなくなった ×ちょっとしたことに用心深くなった</p>	<p>*** *** *** *** * *</p>
<p>殉職した人やケガ人がでた</p>	<p>×またおきたのではないかとびっくりした</p>	<p>*</p>
<p>命の危険を感じた</p>	<p>[再体験] ×繰り返し思い出された ×繰り返し夢にみた ×またおきたのではないかとびっくりした ×思い出させる物で心が痛んだ ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺] ×一人ぼっちになった感じがした ×うれしい気持ち, 楽しい気持ちが少なくなった</p>	<p>*** ** *** *** *** * **</p>

	<p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×ちょっとしたことに用心深くなった ×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>*** *** *** ***</p>
救助を断念せざるを得なかった	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し思い出された ×繰り返し夢にみた ×またおきたのではないかとびっくりした ×思い出させる物で心が痛んだ ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×ちょっとしたことに用心深くなった ×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>* * *** * * *** * *</p>
十分な活動ができなかった	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し思い出された ×繰り返し夢にみた ×またおきたのではないかとびっくりした ×思い出させる物で心が痛んだ ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <p>×話題にすることを避けた ×思い出させる出来事や場所を避けた ×一人ぼっちになった感じがした</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×カッとなり、イライラするようになった ×ちょっとしたことに用心深くなった ×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p> <p>×PTSD症状が現在でも残存している</p>	<p>*** *** *** *** *** *** * * *** *** *** * *** ***</p>
住民やマスコミから非難された	<p>[再体験]</p> <p>×繰り返し思い出された ×思い出すと胸がドキドキしたり緊張した</p> <p>[回避と感情の麻痺]</p> <p>×話題にすることを避けた ×うれしい気持ち、楽しい気持ちが少なくなった</p> <p>[覚醒亢進]</p> <p>×寝つきが悪くなったり中途覚醒がみられた ×カッとなり、イライラするようになった ×ちょっとしたことに用心深くなった ×ちょっとしたことにもひどく驚くようになった</p>	<p>* * * * * * *** *</p>

注) * : p<0.01, ** : p<0.001, *** : p<0.0001

<引用文献>

- Bryant, R.A., Harvey, A.G. 1996 Posttraumatic stress reactions in volunteer fire fighters. *J. Traumatic Stress*, 9;51-62.
- Classen, C., Koopman, C.H., Hales, R. 1998 Acute stress disorder as a predictor of posttraumatic stress symptoms. *Am.J.Psychiatry* 155;620-624.
- Corneil, W. 1995 Firefighters' PTSD at dangerous levels. *APA Monitor*, 26;36-37.
- Fullerton, C.S., McCarroll, J.E., Ursano, R.J. et al. 1992 Psychological responses of rescue workers: firefighters and trauma. *Am.J.Orthopsychiatry*, 62;371-378.
- Fullerton, C.S., Ursano, R.J., Wang, L. 2004 Acute stress disorder, posttraumatic stress disorder, and depression in disaster or rescue workers. *Am.J.Psychiatry*, 161;1370-1376.
- Gersons, B.P.R. 1989 Patterns of PTSD among police officers following shooting incidents: A two dimensional model and treatment implications. *J. Traumatic Stress*, 2;247-257.
- Gersons, B.P.R., Carlier, I.V.E. 2000 災害救助業務に関連した心的外傷への治療的介入（警察官および消防士など） 松下正明総編 臨床精神医学講座6 外傷後ストレス障害（PTSD） 中山書店
- Gist, R., Woodall, S.J. 1995 Occupational stress in contemporary fire service. *Occup.Med.*, 10;763-787.
- 畑中美穂・松井豊・丸山晋・小西聖子・高塚雄介 2004 日本の消防職員における外傷性ストレストラウマティック・ストレス 第2巻第1号 日本トラウマティック・ストレス学会 67-75
- 廣川進・飛鳥井望・岸本淳司 2005 海上保安官における惨事ストレスならびに惨事ストレスチェックリストの開発 トラウマティック・ストレス 第3巻第1号 日本トラウマティック・ストレス学会
- 久留一郎・餅原尚子 2003 災害救援隊のストレス—惨事ストレス（CIS）と外傷後ストレス障害（PTSD）— 心と社会34巻3号 日本精神衛生会
- 久留一郎 2004 PTSD：ポスト・トラウマティック・カウンセリング 駿河台出版社
- Hytten, K., Hasle, A. 1989 Firefighters: A study of stress and coping. *Acta Psychiatr.Scand.*, suppl.355;50-55.
- 五十嵐幸裕 2002 東京消防庁における惨事ストレス対策救急医療ジャーナル
- 伊藤昌夫 1999 惨事ストレスとその対策について 近代消防 37(3) (通号451)
- 岩井圭司・加藤寛・飛鳥井望・三宅由子・中井久夫 1998 「災害救援者のPTSD—阪神・淡路大震災被災地における消防士の面接調査から—」 精神科治療学 13(8) 971-979
- 岩井圭司・加藤寛 2002 「災害救援者—阪神・淡路大震災の救援業務に従事した消防職員と、避難所の運営にあたった公立学校教職員の健康調査にみられたPTSD症状」 臨床精神医学増刊号
- 加藤寛 2001 6. 災害救援者 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究班 主任研究者 金吉晴 じほう
- 古賀章子・前田正治・進藤啓子・丸岡隆之・川村則行 2003 消防業務とトラウマティック・ストレス—福岡市消防隊員に対する疫学調査の結果から— 九州神経精神医学 49(1) 44-49
- 古賀章子・前田正治・津田彰 2003 消防隊員とトラウマティック・ストレス 久留米大学心理学研究第2号 89-96
- 小西友紀 2001 震災後の消防職員と心的外傷後ストレス 労働の科学 56巻11号 12-15
- 神戸市消防局「雪」編集部 川井龍介 1995 「阪神大震災—消防隊員死闘の記」 労働旬報社
- McCarroll, J.E., Ursano, R.J., Fullerton, C.S., et al. 1995 Gruesomeness, emotional attachment, and personal threat: Dimensions of the anticipated stress of body recovery. *J.Trauma.Stress*, 8;343-349
- Marmar, C.R., Weiss, D.S., Metzler, T.J. et al. 1966 Stress responses of emergency services personnel to the Loma Prieta earthquake interstate 880 freeway collapse and control traumatic incidents. *J.Trauma.Stress*, 9;63-85.
- 松井豊・畑中美穂 2003 災害救援者の惨事ストレスに対するディブリーフィングの有効性に関する研究展望1 筑波大学心理学研究第25号
- 南裕子編 1995 阪神・淡路大震災—その時看護は—日本看護協会出版会
- 餅原尚子・久留一郎 2005 惨事ストレス（CIS）、外傷後ストレス障害（PTSD）に関する実態調査—惨事状況とストレスの関係に視点をあてて— 日本心理臨床学会第24回大会 発表論文集
- Moran, C.C. & Colless, E. 1995 Perceptions of work stress in Australian firefighters. *Work Stress*, 9;405-415.
- Nurmi, L.A. 1999 The sinking of the Estonia: The effects of Critical Incident Stress Debriefing (CISD) on rescuers. *Int.J.Emerg.Ment.Health*, 1;23-31.
- ラファエル（石丸正訳）1988 災害の襲うとき—カタストロフィの精神医学—みすず書房 340-375
- 総務省消防庁 2003 「消防職員の惨事ストレスの実態と対策の在り方について（概要）」 月刊フェスク（259）
- 総務省消防庁消防課 2003 「消防職員の惨事ストレスの実態と対策の在り方—消防職員の現場活動に係るストレス対策研究科報告書—」 近代消防2003年6月号
- 東京消防庁 2001 「凄惨な火災現場で受けるストレス—メンタルヘルス対策（2）」 消防通信 28(4) 通号566
- 東京消防庁 2001 凄惨な火災現場で受けるストレス：メンタルヘルスケア対策（終） 消防通信 567号
- Ursano, R.J., Fullerton, C.S., Vance, K. et al. 1999 Posttraumatic stress disorder and identification in disaster workers. *Am.J.Psychiatry*, 156;353-359.
- Weiss, D.S. & Marmar, C.R. 1997 The Impact of Event Scale-Revised: (eds.), Wilson, J.P. & Keane, T.M. Assessing psychological trauma and PTSD. The Guilford Press, New York, 399-411.

Stress in Fire Fighters, Coastguard Officers, Policemen and Emergency Medical Rescuers:
A Clinical Psychological approach (I)

～The situation of critical incidents and stress～

Disaster experiences have great influence on rescuers as well as direct victims. In line with what preceding research has made clear in foreign countries, the occurrence rate of post-traumatic stress reaction in Japanese rescuers is also very high. Rescuers involved in a disaster also suffer from the same stresses as victims in meeting with a disaster. Moreover, they are professional rescuers and take other kind of stresses. For example, they cannot avoid going to a disaster scene. They are subject to social expectation and have some strong professional sense, such as a duty or responsibility to live up to. There is also some atmosphere in an organization that means they cannot complain to or consult with anyone. If they are gagged, the matter must be worse.

The purpose of this treatise was to analyze the situation of critical incidents and stress in fire fighters, coastguard officers, policemen and emergency medical rescuers and to clarify the features of their stresses.

We sent out a questionnaire and received replies from 356 fire fighters 80 coastguard officers, 854 policemen and 200 emergency medical rescuers.

According to the results of the questionnaire, we clarify as follows: As for critical incidents, fire fighters clearly face the most horrible critical incidents.